

2学年通信

Dreams come true

山形県立米沢興譲館高等学校

2学年通信 No.40 通算 104
2016.7.28 (木) 発行

「吹奏楽」ってなんでしょう。

土井広一

教員生活〇〇年、吹奏楽と関わって〇〇年になりますが、「吹奏楽の顧問をやっている」と言っ「キャー、素敵」と言われたことは（残念ながら）一度もありません。吹奏楽はとにかくうるさいし、楽器はお金がかかるし、運動部のようなトレーニングをしているし、大会の時期も他の部活動とズレてるし、そもそもなんだか胡散臭いし…、厄介がられることが多い（と思うの）です。顧問のせいでしょうか？ いいえ違います。ここからは希望的観測ですが、それは吹奏楽がみなさんにとって不思議なものだから、だと思っのです。そこで、わたしが思う吹奏楽の不思議・厄介な点を三つ、まとめてみました。

①「とにかく人数が多い。」

10年前(?)くらいに規定が変わり、以来、吹奏楽コンクールは大編成と小編成の2部門で競われています。その「大編成の部」は、規定人数が55人以下という部門です。もっとも今年の吹研は43人で出場していますが（他のバンドより10人以上少ない人数ですが、同じ土俵で戦っています）、それでもひとつの種目に臨む人数としてはかなり多いと思っのです。この時期の音楽室はその人数によって発せられる熱と、吐き出される二酸化炭素によって温暖化との戦いの場になっています。

②「隣にいる人が、自分とは全然違う道具（楽器）を持っている。」

たとえば剣道ならみんな竹刀を持ち、ホッケーなら（キーパー以外は）スティックを持ち、バスケならバスケットシューズを履いて競技すると思っのですが、吹奏楽は違います。木、金属、膜…、一人ひとり持っている道具は素材も発音原理も何もかも違います。もはや同じ部活に所属しているのが意味不明です。

③「隣にいる人が、自分とは全然違う動きをする（メロディを吹く）。」

持っているものも違えば、やること（楽譜）も一人ひとり違います。必要な技術も全然違います。これも他の部活動にはない吹奏楽の特徴ではないでしょうか。一人ひとり違う道具で違う動きをするのに、ひとつのものを作り上げなければいけません。ややこしい。

他にも不思議・厄介なことはたくさんありますが…、でも、この不思議なことが、吹奏楽の魅力だったりするようです（ややこしい）。その魅力に憑りつかれてしまった人は、どうやら②や③のような状況を愛し、①の過酷な状況を楽しんでいる様子。…不思議ですね。

つらつらと書いてしまいました。そんなゴチャゴチャの43人が、毎日顔を合わせ、練習し、同じステージに乗って演奏するわけです。一人ひとり違う道具で違うことをするので、誰ひとり欠けてはなりません。それは本当に奇跡に近いことだなぁ、といつもながら思っます。次のステージでも、感謝の気持ちを忘れずに演奏していきたいと思っます。そして…、わたしの心配は、終業式の校歌みんなどうやって歌うんだろう…、ということです。

吹研です！

2年5組 O. Aさん

みなさん、こんにちは。吹研です。7月17日(日)に長井市民文化会館で行われた「吹奏楽コンクール山形県置賜地区大会」において優秀賞を頂き、県大会への切符を手に入れました。ワーイ！ということで、部員の人から大会に向けての意気込みを書いてもらいました。見にくいので、紙をくるくる回してお楽しみ下さい。

Aさんはどこでしょう？→



上野謙二郎先生物語Ⅰ 横山

関連することが、ある時期に集中して起こることがあります。今月は「吹奏楽」がそうでした。土井先生に原稿依頼をした翌日、新山中学校吹奏楽部の後輩であるS野さんから連絡をもらいました。「上野謙二郎先生を囲む会をします。今回、横山さんも参加しませんか？」と。ということで、7月24日(日) 美味しいラーメンと牛筋煮込みで有名「あっさり」にて「上野謙二郎先生を囲む会」が計画された。ちなみに、同店のK野マスターは、新山中吹奏楽2コ上の先輩である。今は皆さん普通の社会人をしておられますが、2コ上は「置賜制覇」とか「米沢〇中に討ち入り」とか凄いことを実践されていた先輩方である。まさに「昭和版ハイ&ロー」である。それにしても、上野先生とお会いするのは、数年前に先生が「米興合唱コンクール」の審査員として来校されて以来。うう、少しドキドキする…。

中学の頃、朝7時前には毎日「羽前小松駅」にいた。上野先生は米沢から国鉄（今のJR）で通勤されていた。車の免許はお持ちだったので、なぜ汽車だったのかは不明だけれど、兎に角、吹奏楽部の幹部は駅に先生をお迎えし、先生のカバンを持ち、先生から3歩下がって部長以下、行列して中学まで歩くのが日課だった。先生がそうしろと言ったことは無いのだけれど、先輩から連綿と受け継がれてきた伝統であり、無意識にも先生への感謝と畏敬の念が、そこにあったかもしれない。先生は何も話さないのだけれど、その背中を見ながら1年358日登校した。学校に着くのはほぼ1番で、先生が学校の鍵を開け、僕たちが生徒昇降口を開けた（私たちでもイイのだけれど、中坊なのであえて「僕たち」とした。また、自分の今の生活習慣は、上野先生との体験からかもしれない）。放課後の練習が終わるのも毎日1番最後。であるから、僕たちは練習後に校舎の全ての窓の施錠が日課。最後に校舎を出る先生を職員玄関で待ち、朝と同じ隊列を組んで駅へ向かう。駅のホームで列車を待つ先生と僕たち。知らない人は何だと思っでしょうが、小松村で上野先生を知らない人はいない。帽子をかぶり列車に乗る先生。今思えば、何かフランス映画の1シーンのようです。先生、本当にカッコイイのです。

さて、今日は囲む会。82歳の先生は、あの頃のように米坂線で来られるというのです。これもカッコよすぎです。お迎えに行けなかったのだけれど、先生は私達の「ノスタルジックヒーロー」です。車でいえばスカイラインZ432R、バイクならCR110あたりですかね？さて夕方、そこには35年前と何ら変わることはない先生が、スーツ&ネクタイを「ビシッ！」と決めて鎮座されており、私を見るなり「伸ちゃん元気かい？ホッケーやっているかい？」と微笑みかけてくれた。ああ、さすが上野先生だ。数年ぶりであるけれど、私のことや近況までも全て覚えてくれている。私は情けないことに記憶が弱い。けれど、先生を見ると「生徒のことを記憶に記録してあげる」ことこそが、私達教員の使命なのかもしれないと思わされた。**続**

